

教科書文庫
5
810
45-1949
0130449676

中等國語 二

文部省著作教科書

文部省

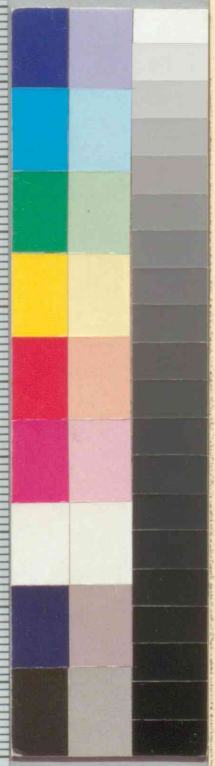
昭和
東京市立中學校

(3)

60373

教科書文庫

5
810
45-1948
01304 49676



教科書文庫

5

810

45-1949

0130449676

中央図書館

中等



國語

文部省

二

広島大学図書

0130449676



(3)

広島大学図書

0130449676



目 録

一 自分は太陽の子である	一
二 音と文字	二
三 希 望	八
四 鬼にこぶ取らるること	十四
五 夜中の音楽	十八
六 地藏の話	二十四
七 ひさかたの	三十五
八 木の根	三十七
九 ひとりの力	四十二
附 録 國語學習の手引	五十五

一 自分は太陽の子である

自分は太陽の子である。

まだ燃えるだけ燃えたことのない太陽の子である。

今口火をつけられている。

そろ／＼くすぶりかけている。

あゝこの煙がほのおになる。

自分はまっぴるまの明かるい幻想にせめられてやまないのだ。

明かるい日光の原っぱである。

ひかり充ちた都会のまん中である。

みねにはずかしそうに純白な雲が輝く山脈である。

自分はこの幻想にせめられて、

今くすぶりつゝあるのだ。

黒いむせぼったい重い煙を吐きつゝある。
あゝひかりある世界よ。
ひかりある空中よ。

あゝひかりある人間よ。
総身目のごとき人よ。
総身をうげ彫りのごとき人よ。
りこうで健康で力のあふるる人よ。

自分は暗い水ぼったいじめく／＼した所からうぶ声をあげたけれども、
自分は太陽の子である。
燃えることをあこがれてやまない太陽の子である。

(福士幸次郎著「太陽の子」による)

二 音と文字

冬になると、子供の時に見た青いみかんを思い出す。まだ出たての、皮などが堅くて、なでると、
きめががさ／＼している。したがってそのかおりも強い。そういうことによって、私は初冬を感じる
のである。

冬になると、今まで明け放していた戸障子をしめて、長火ばちなどに向かってすすわった時は、非常
に落ち着いた感じのするものである。

冬の夜、火ばちを囲んで、家族の者が話をしたり、氣のあけないお客と、とりとめもない話をして、
思わず夜をふかすのも、冬の一種特別の氣持がしてあもしろいものである。

私は、冬になると寒いので、ぶしようにして寢床の中で勉強する。それはあかりもいらす、あおのけ
になつて、おなかの上で点字を探り／＼本を読んだり、点字の道具を動かして書いたりする。寒い夜
中などは、落ち着いた氣持になる。戸障子ががた／＼いうのを聞きながら作曲しているのは、いい氣
持のもので、徹夜などすることは、少しも苦勞ではなく、頭を使っていると、そのうちからだが温
かくなつて来る。作曲をしない時でも、今のような調子で読書すると、落ち着いて頭によくはいる。
これは盲人独得の世界で、目明さにはちよつと想像できない楽しみなものである。私はよく合奏を自
分の頭で作って、音の世界を想像しているが、よいものである。

私は四季のうちで、冬の雨はあまり好きでない。雪はだれしも同様によいものであるが、雪はだ
たいにあいて、そう音のしないものである。しかし、ひどくなると、こまかい音が続いて聞えて来る。
それが木の葉などに当たると、雨とは違ってあもしろいものである。また雪でなく、あられなどが堅
い木の葉に当たるとあもしろい。

それから、雪の朝など、いやに静かな時に、たくさん雪が積もっていて、人の通っている足音を聞

くと、舟のろをこいでいる音を聞くような感じがする。私は雪の日に外を歩いたりするのは好きであって、かさなどに降りかゝって来るのは、雨と違って氣持のよいものである。歩いている間に、だんだんせいが高くなって行く。また人が道のわきに寄って、げたの齒などにはさまった雪を、はたいているのも、冬の趣の深いものである。

雪の朝は、日が照って来ると、雪がそろ／＼解けはじめる。すると／＼の調子でしずくが落ちて来る。解けて落ちて来るのが非常に速いかと思うと、トリブレット(三連音)で落ちて来る場所もあるし、また場所によって、ゆっくり落ちて来るのがある。時々屋根から大きな塊が、こまかいリズムで落ちて来るのは、何かちどかされるような氣がして、おもしろい。私はこうした時、波のざあという音を思い出す。木の枝などからも、どしんと落ちる時がある。寒い日などは、晝のうち解けきらずにいて、夜中などになって、思いがけなくどしんと落ちて来て、ちどかされることがある。

私は、冬になると、北風がきらいで、これが吹いて来ると、氣分がわるくなって、からだの調子がどうもよくない。そんな日に、大事な演奏とぶつかると、氣が向かなくて困ることがある。

また冬になって、近隣の山に雪が降っていると、自分が住んでいる土地に雪が降らなくても、よそで降っていることを身を感じるのである。よく家内に、冬になればどこかで雪は降っていますよ、とからかわれるけれども、実際に、私にはわかるのである。

冬、南風の吹くのはたいへん好きである。そんな時は、氣持がよくて、身も豊かになる。いずれにしても、四季の氣分をこまかに味わってみると、口には言えぬおもしろい趣があるものである。

春が来ると、何かこう南風が吹いて暖かい感じがするので、春の訪れたことを感じる。春になる

と、私の住んでいる所へ、毎年同じ声の小鳥が来たことがある。また翌年も同じ声で鳴き、やって来る時期も同じころらしい。どうも声の高さから、また音色からして、同じ鳥だということを、三年めぐらいから感じたのであった。私はそれを印象にして、「春の訪れ」という曲を作った。やはりそういう鳥も、毎年同じ生活をしているのだなあ、と思った。

春の朝などは、なんとなく自分に仕事をやれと言われるようで、希望に満ちたところがある。自分のへやの窓から朝日がさして来ると、何か仕事をしなければならぬと思うのである。

それから、春の晝過ぎのごく天氣のよい静かな日に、自分のほおへ暖かな日が照っている時に、省線電車の走る音が聞えて来る。それなんかは非常にのどかな氣がする。また庭の方で、ぶらんとあぶらしいものの羽音が聞えるのもよく、鳥の高音にさえずっているのもよいものである。

全く風のない時、ちょっと思い出したように、かすかな風が吹き出して、庭の木の葉やさ／＼葉を軽くゆすぶる時などは、なんとなくのんびりとして、よいものである。昔から、月夜に、故郷や友人や、昔のことを思い出すように、春ののどけさは、眠たいような縁先に出ていると、いろ／＼のことを何かと思ひ出させる。

一花見の人などで外がにぎわっている時、家において静かに勉強するのもまた楽しいものである。春の夜散歩することなどは非常に氣持がよいものである。おぼろ月夜などは自分には見えなくても、自分のからだにそんなふうを感じられる。そんな夜にはよく昔のことを思い出す。

私は、春雨のしと／＼降る日に、いろ／＼な調子の雨だれの音を聞きながら作曲すると、よくまとまる。ことに夜など寢床の中にいて、庭に落ちる雨の音を聞いているのはおもしろいものである。芽

生えのしている木などに落ちる時などは、自分にもなんとなく、そんな気がするのである。

雨の日に外出して、番がさに雨が降りかゝる音を聞きながら歩いてみると、同じ外を歩くにしても、のんびりとした情緒が起る。そんな時には、くつの足音よりも、高げたを踏む音の方がよい。

春から夏へ変わる時、また雨の降る前とか、氣候の代わりめなどには、どういふものか、私には市内じゅうの電車の音や、自動車の音が、海鳴りのような感じで聞えて来る。

(宮城道雄著「雨の念佛」による)

二

宮城檢校と佐藤春夫氏とは、その日はじめて会ったのである。佐藤氏はイタリア産の磁製の鈴を檢校に贈って、初対面のみやげ物にした。座談は音楽の話から文章のことに及び、宮城檢校が増鏡や枕草子などの古典を点字で読んだ記憶によって、こういうところはどうかというふうになじみがあるので、私どもの方で閉口した。「とんだ塙保己一だ。」と言って笑った。

佐藤氏が、こういうことを言った。「雨の念佛」の文章は話すまゝのことばをもつてつゞいてあるから、全巻を通じて同音両義のあいまいな用語が一つもない。ラジオの放送者は人が耳で聞いていることを考えないで、目で読んでではじめてはつきりするような字句を不用意に用いるから、時々意味があいまいになる。宮城さんの著書にはそういう点が少しもない。そのまゝ誦読するのを聞いても、語意が二義にわたるようなところのないのは、さすが盲人の文章であると感じた。

佐藤氏の説を聞いて、私はその卓見に敬服した。「雨の念佛」については、私自身の所見もあり、また諸方面から寄せられた賛辞もいろ／＼読んだけど、今佐藤氏の説いたような意見を聞くのははじめてである。それで、私は佐藤氏に附和して自分の思うところを述べた。佐藤氏の説は即ち「雨の念佛」が純粹言語をもつてつゞられていくということに歸する。本來耳の所有物であるはずのことは、文字と印刷術とのために、いつのまにか目の所有となろうとしている。そこへラジオの發明があつて、またいくらかことばが耳に返るうとしていく。

宮城檢校が耳だけによつて所有することばをもつてつゞいた文章は、即ち今日、われ／＼の有することばを、その本來の、最も純粹な姿で再現したものである。晴眼にして文をやるわれ／＼の學ぶべきところが多々あるに違いない。

それからまた私はこういうことを考えた。中学の時に象形文字と音標文字とについて教わったところによると、象形文字は未開の文字であつて、音標文字の方が進歩している。漢字よりはローマ字の方が文明國の文字である……。しかし今「雨の念佛」の文章からそのことを考え及んでみると、どうもその逆のような気がし出した。ことばは本來耳のものであるにしても、また目がこれを読むことを妨げる筋はない。ことばを文字の形に換えて、これを見て読むという上からいえば、つまり目のことばとしては、音標文字よりも象形文字の方が便利であり、複雑な意味を託するに適しており、結局進歩した文字ということになりそうである。音標文字の意味はむしろ中途半端で、同じく目で見る物としては形があいまいであり、それかといつて音標文字をいくら耳に近づけても声はしない。音符程度の約束上の符号にすぎないのである。そういうことを私はもの／＼しく述べ立てた。象形文字も音標文字もなんにも見えない宮城檢校は、はあ／＼と言つて、私の説に感心したようである。

(内田百閒著「凸凹道」による)

三希望

小学校三年の「國語」で、「心と心」というのを学習した。

あの時から、日本のあちこちに、手紙の上での友だちができた。

このごろそれらの友だちと相談して、將來の希望を述べ合うことにした。

「酪農生活をする」といった北海道の学友もあり、「果樹とともに」といった青森の友だちもある。

「炭坑で働く」という九州の人や、「日本舞踊の新境地を開く」といさおいこんでいる東京の人もある。「和紙の製作に従事しよう」とする人も、「植樹を一生の仕事」と念じている人もいる。

次に掲げるのは、そのごく一部分のものである。

一

ぼくは「日本の宝石」といわれている瀬戸内海の島に生まれたことを心から感謝している。

瀬戸内海ばかりではない。日本全体がすでに美しいのである。自然の多彩な変化に恵まれており、

そぼくな民俗情緒を持ち、歴史的な建造物や藝術品なども保存されている。アジアの中では豊かな観光資源を持っている國土といわなくてはなるまい。

ぼくは、將來日本がすぐれた観光國家として立ちあがることを信じていたのである。いや、そうさせなくてはならない。

ぼくの兄は、今美術学校に在学中であるが、卒業後は、やはり観光事業のために働くといっている。

「美」ということをほんとうに知るために、日本画に精進しているわけだ。

ぼくは、今こんなことを考えている。國々の往來が自由になると、世界でも一番旅行好きだといわれるアメリカの人たちは、さっと太平洋を渡って、日本漫遊に来るだろう。そのころは、優秀な豪華船によって、どん／＼航海して来るだろう。また、大型の輸送航空機の活躍によって、一気に飛んで来る人もあるだろう。おそらく、年に数十万の観光客がわが日本を訪れて来るに違いない。

一体観光事業は、國際親善の意味を持つばかりでなく、更にまた文化の交流を促進するたいせつな役割を果たすものである。日本が、いかに風景が美しく、目を樂しませる所であるとしても、それだけでは、海外の旅客を誘致するには十分でない。

これも兄から聞いた話であるが、昭和十年ごろ、アメリカのガーデン協会の人たちが、あちらこちらの庭を見物して、その美しさにみな満足して帰ったという。しかしこのような自然の風景や人工の美だけでは、眞に觀光國の資格を持つことにならない。海外の旅客を呼ぶためには、もっと便利な施設や樂しい設備がいたるところに整えられなくてはならない。

ところが現在はどうであろうか。汽車は破れ、汽船は乏しく、ホテルは修復されず、道路も不完全、何一つ観光客を満足させるものとはならない。ぼくたちは、一日も早くこの復興に力を盡くさなければならぬ。

兄は、瀬戸内海を紹介するポスターを、もう何枚か書きあげている。ぼくは、その中に、短い詩を書いた。

將來、どれほど交通機関がうっぴになり、文化施設を充実したとしても、もし、外國の人たちに対

して、われ／＼日本國民が道義心を失うことがあつたらどうであらう。ぼくのこの夢は、はかなく消えてしまふに違いない。

よその國の人々をほんとうに心から迎え、眞実を示し、友情をもつて接する國民になつて行きたいものである。

どん／＼観光客が日本を訪れて来る日を思うと、愉快でならない。

ぼくは、どうしても「日本の宝石」を「世界の宝石」にしたいと思つてゐる。

二

あの不思議な糸の世界に魅せられる。

一筋一筋の糸が、杼の尾となつて、

こまかに織りなされて、

一枚の花びらが散つて来る、

黄色なちようちよが飛んで来る、

細い流れが流れて来る、

小鹿こじかのまだらが現われ、

若草のしとねが廣がつていく。

私のおばさんの織るにしき織の魔法が、

今でも私を捕らえてはなさない。

私は、こんな壁かけを夢みる。

白いちぎれ雲が飛んでいる。

秋の七草の咲き乱れた中に浮かんだ、

遠く白い一本路。

露が星のように光る。

な／＼めに飛ぶ小鳥の群れ。

私は、おばさんのあとを継いでいきたい。

たとえ三月でも半年でも、腰かけ通したつていい。

かたつむりよりも遅い進みかたでもいい。

一筋一筋の糸が、私の心の絵をかたどつていったとしたら、

なんと楽しいことだろう。

なかよしの美代子さんは、友禪染屋さんになりたいといつてゐる。

家業かそうなのだから、な／＼いいだろう。

蒸したり、洗つたり、干したりするたびに、

染料がしつとりと布地にしみこみ、

一色一色重なつていくところが好きだという。

染める仕事も、
織る仕事も、

心の絵を作りあげていくことにかわりはない。

この土地で育つたいわれのあるこのたくみ、
もっとすぐれたものに育てあげて、

世界の人たちに喜ばれるような、

輝かしい日本の手工業を、

この京都から生み出したい。

美代子さんといっしょに。

三

わが郷土「瀬戸」の名をはずかしめない陶工になりたい。瀬戸は日本最古の窯場であり、また最大の窯場である。

藩政時代には、保護を受けたり、干渉をされたりしたこともあったが、決して御用窯でもおとめ窯でもなかった。どこまでも、ぼくたちの祖先の窯工たちが、自由意志によって製作して来たというところに、瀬戸陶史の特色がある。

生活を護ってもらえないから、みずからの手で生きて行かなければならないということになる。わが祖先たちが、日用品雑器の下手物を大量に生産して来たのは、そのためである。

当時の殿様や金持などから注文を受けて、意匠をこらし、贅を盡くして作りあげたものもりっぱであるが、雑器類は、これらに比べて、劣っているとは思わない。かえって、あるものは、より健康であり、正直であり、のび／＼としている。

私は、これらの名も知らぬ雑器や日用品の焼物を見て、こんなことを想像する。

殿様のお台所などで、足軽たちに無雑作に使われている柳茶わんや、馬方が茶屋にちよつと腰を掛けて手にしている、にしめざらや行平、だれも振り返ってはくれないあんどんの油ざら……

これらの雑器は、どのだけが、焼いたものであるか。いつごろでさあがったものであるか。そんなことが、全くわからないだけに、これらの下手物に心が引かれる。

一体、瀬戸の焼物は、その焼物自体が、人間の手によって作られたという感じよりも、どこことなく自然のものそのまゝといったような美しさなのである。山道を歩いていて、ふと見つけた岩石のまもしろさのような感じであるが、その岩石は、清水にぬれ、青々としたこけがついているようなふぜいを示している。

瀬戸の焼物は、いかにも飾りけがなくて淡々としている。しかし、たゞつめたいというのではなく、どこことなく人間のいぶさが通っている。人間の生活と自然の美とがうまく調和されている。

祖父の代から陶器製造を業としている家に生まれた私は、祖父の名をはずかしめないで、光榮ある美の傳統を受け継いで行こうと思う。これからは、いっそううでをみがいて、工業生産の面にも進出し、世界の市場に雄飛したいと考えている。

瀬戸の市中を流れるあの白く濁った川を見、窯焼く煙で曇る空を見て、いよ／＼私は、將來の仕事

にあこがれる。

四 鬼にこぶ取らるること

宇治拾遺物語

われくが幼いころから聞きなじんたなつかしいおとぎ話は、一体いつごろの話なのであろうか、どんなにして傳えられたものであろうかという疑問がふと起る。そこで「こぶとり」の話をとりあげて、それらについて考えてみることにしよう。

この話は、鎌倉時代の説話文学である「宇治拾遺物語」によつたものである。この中にはこのほかいろくなおもしろい話が収められている。

「こぶとり」の話は、日本の童話に傳わつていられるばかりでなく、調べてみると、朝鮮や中國の童話にもあり、更にヨーロッパの國々にもあるということはおもしろい。

楽しく聞き流してしまふおとぎ話も、調べてみるといろいろ興味のある問題を持つてゐる。このようにして、もう一度昔話を読んでみよう。

これも今は昔、右の顔に大きなこぶある翁ありけり。大かうじのほどなり。人にまじるに及ばねば薪をとりて世をすぐるほどに山へ行きぬ。雨風はしたなくて歸るに及ばで、山の中に心にもあらずとまりぬ。またさこりもなかりけり。恐ろしさすべさかたなし。木のうつぼのありけるにはひ入りて、目も合はずかゞまりてゐたるほどに、はるかより人の声多くして、とゞめさ來る音す。いかにも山の中にたゞひとりゐたるに、人のけはひのしければ、少しいき出づるこゝちして見出だしければ、おほ

かたやうくさまゝなる者ども、赤き色には青き物を着、黒き色には赤き物を着、たふさぎにかき、おほかた目一つある者あり、口なき者など、おほかたいかにもいふべきにあらぬ者ども、百人ばかりひしめき集まりて、火をてんの目のごとくにともして、わがゐたるうつぼ木の前にゐまはりぬ。おほかたいと物覚えす。むねとあると見ゆる鬼横座にゐたり。うらうへに、ふたならびにゐなみたる鬼数を知らず。その姿おのくい盡くしがたし。酒まゐらせ遊ぶありさま、この世の人のするぢやうなり。たびくかはらけ始まりて、むねとの鬼ことのほかに酔ひたるさまなり。未より若き鬼ひとり立ちて、折敷をかざして、何といふにかくどき、くせざることをいひて、横座の鬼の前にねり出でてくどくめり。横座の鬼、さかづきを左の手に持ちてゑみこだれたるさま、たゞこの世の人のごとし。舞ひて入りぬ。次第に下より舞ふ。あしく舞ふもあり、よく舞ふもあり。あさましと見るほどに、この横座にゐたる鬼のいふやう、

「こよひの御遊びこそいつにもすぐれたれ。たゞし、さも珍しからんかなでを見ばや。」などいふに、この翁、物の憑きたりけるにや、また神佛の思はせたまひけるにや、あはれ走り出でて舞はばやと思ふを一たびは思ひ返しつ。それに何となく、鬼どもが打ち揚げたる拍子のよげに聞えければ、さもあれ、たゞ走り出でて舞ひてん、死なばさてありなん、と思ひ取りて、木のうつぼより、ゑほしは鼻に垂れかけたる翁の、腰によさといふ木切る物さして、横座の鬼のゐたる前にをどり出でたり。この鬼どもをどりあがりて、

「こは何ぞ。」と騒ぎ合へり。翁伸びあがりかゞまりて、舞ふべき限り、すぢりもぢり、えい声を出だし一庭を走りまはり舞ふ。横座の鬼よりはじめて、集まりゐたる鬼どもあざみ興ず。横座の鬼のいはく、

「多くの年ごろこの遊びをしつれども、いまだかゝる者にこそ会はずつれ。今よりこの翁、かやうの御遊びに必ず参れ。」といふ。翁申すやう、

「さたに及び候はず参り候ふべし。このたびにはかにて、をさめの手も忘れ候ひにたり。かやうに御覽にかなひ候はば、静かに仕うまつり候はん。」といふ。横座の鬼、

「いみじう申したり。必ず参るべきなり。」といふ。奥の座の三番にゐたる鬼、

「この翁はかくは申し候へども、参らぬことも候はんずらんと覺え候。質しちをや取らるべく候ふらん。」といふ。横座の鬼、

「しかるべし、しかるべし。」といひて、

「何をか取るべき。」と、おの／＼言ひざたするに、横座の鬼のいふやう、

「かの翁がつらにあるこぶを取るべき。こぶは福の物なれば、それをや惜しみ思ふらん。」といふに、翁がいふやう、

「たゞ目鼻をば召すとも、このこぶは許したまひ候はん。年ごろ持ちて候ふ物を、故なく召され、すぢなきことに候ひなん。」といへば、横座の鬼、

「かう惜しみ申す物なり。たゞそれを取るべし。」といへば、鬼寄りて、

「さは取るぞ。」とて、ねちて引くにおほかた痛きことなし。さて、

「必ずこのたびの御遊びに参るべし。」とて、曉に鳥など鳴きぬれば、鬼ども帰りぬ。翁顔をさぐるに、年ごろありしこぶ跡かたなく、かいのごひたるやうにつや／＼なかりければ、きこらんことも忘れて家に帰りぬ。

妻のうば、「こはいかなりつることぞ。」と問へば、しか／＼と語る。「あさましきことかな。」と云ふ。

隣にある翁、左の顔に大きなこぶありけるが、この翁こぶのうせたるを見て、

「こはいかにしてこぶはうせたまひたるぞ。いづこなるくすしの取り申したるぞ。われに傳へたまへ。このこぶ取らん。」といひければ、

「これはくすしの取りたるにもあらず。しか／＼のことありて鬼の取りたるなり。」といひければ、

「われそのぢやうにして取らん。」とて、事の次第をこまかに問ひければ、教へつ。この翁いふまゝにして、その木のうつぼに入りて待ちければ、まことに聞くやうにして鬼ども出で來たり。ゐまはりて、酒飲み遊びて、

「いづら、翁は参りたるか。」といひければ、この翁、恐ろしと思ひながらゆるぎ出でたれば、鬼ども、

「こゝに翁参りて候。」と申せば、横座の鬼、

「こち参れ。とく舞へ。」といへば、さきの翁よりは天骨てんこつもなく、おろ／＼かなでたりければ、横座の鬼、

「このたびはわろく舞ひたり。かへすがへすわろし。その取りたりし質のこぶ返したべ。」といひければ、末つかたより鬼出で來て、

「質のこぶ返したぶぞ。」とて、いま片かたの顔に投げつけたうければ、うらうへにこぶつきたる翁にこそなりたりけれ。ものうらやみはすまじきことなりとか。

五 夜中の音楽

私は今、北海道の札幌市さっぽろにいますが、時々用事があって東京まで出かけます。札幌をたつて、函館はこだて本線を汽車に揺られて約九時間、北海道の入口の函館港に出て、そこから連絡船で津軽海峡を渡り、青森からまた汽車に乗って、約二十時間で東京駅に着きます。この旅は決してらくな旅ではありません。船も汽車も、いつも旅の人でいっぱい。汽車ではすわる場所の取れることなどは珍しいくらいで、私などはいつもたいてい、狭い通路や、入口に近い床の上などにすわり続けたまゝ、夜もまんじりとはできないで、揺られ続けて行くのです。

そんな苦しい旅をして、何度か札幌と東京の間を行き来しているある時のことでした。その前日のお晝過ぎの船で、青森から函館に渡り、夜の九時何分かの汽車で函館をたつて来た私は、東京でのいろいろの用事、二日続きの夜行列車の疲れなどで、その時はちょうどいいぐあいに窓ぎわに席も取れたし、ぐっすりと寝こんでいました。その私が、何かの物音でふと目を覚ましたのは、もう、真夜中の二時か三時ごろのことでもありましたらうか。気がついてみると、汽車はもうよほど前からどこかの見知らぬ駅にとまっている様子で、この駅でのぼりの汽車を待つてもいるのでしよう、乗りおろすお客の物音もやみ、寝こんでいる人も多いとみえて、車内もしんと静まり返っているのです。

何心なく顔をあげて、外を見ますと、雨が降っていたのか、プラットホームの砂がしつとりとぬれていて、その向こうに、駅の本屋と並んで、轉轍機てんてきというのですか、線路をつけかえる時に動かす

長いえのついた機械を幾つか並べた板小屋のようなものが見え、そのあたりにもだれひとり人の影は見えないのです。小さいいなかの駅らしく、その板小屋のすぐ上には、こんもりと葉の繁ったさくららしい木のぬれた幹が、本屋の窓からもれるうす暗い電燈にぼうつと照らし出されているのです。

そう、くしい駅のプラットホームにもこんな静かな時があるのかなあと、うつとりした氣持で外を見入っていた私の耳に、その時、思いがけないにぎやかな音楽のひびきが、あまり遠くない場所から聞えて来ました。

気がついてみると、その音楽は駅の本屋の中からひびいて来るのですが、その時だしぬけに聞え出したのでなく、そのずっと前から続いていたのだということ、がわかりました。そんな時間でしたから、もとよりラジオではなく、夜勤の駅の人がなくさめにでもかけているらしいレコードなのです。しかもその音楽は、何か私に一つのことを思い出させるような聞き覚えのある曲でありました。

「はて、なんだらう。」

私には曲目もわからねば、その駅の名も思い出せませんでした。しかし、それはまごうかたもない中國の音楽でありました。中國の女の人が歌っていて、聞き覚えのある胡弓こきうの音がところどころにはつきりとまじっているのです。そういえば、おと、しの終戦後、ラジオやレコードを通して音楽を聞く機会がとてふえましたが、どういふわけか中國の音楽を聞くことがほとんどありません。中國の音楽といえば、中國のしばいのおはやしのことなどを考えて、何かそう、くしい、がん、く、じゃんじゃんと鳴りひびく物音ばかりを想像する人が多いかもしれませんが、そんな聞き方をしていただけでは、まだほんとうの中國の音楽を聞いたということにはなりません。

私は中國の音楽のことはなんにも知らないのですが、戦争のさいちゅうに六箇月ほど向こうにいたので、その間に、中國の音楽を聞いたり、しばいを見たり、中國の女の人の歌を聞く機会などがたくさんあって、ちょっと口では説明できませんが、中國のしばいや、音楽の特別の美しさ、おもしろさが自然に耳にわかるようになっていたのです。わかるとかわからないとかいうのでなく、私の生涯でのたった一度の外國生活——祖國を離れたその中國での六箇月の暮らしが、そういう何か忘れがたいものを私に残していたのです。中國の日の光、中國の町の物に、中國のいなかの景色や子供たちの遊びぶり、そして中國のしばい、中國の音楽……。

みなさんは、音楽というものが妙に人の心をその奥底から動かすものだということに気がついていますか。いや、こんなふうになってしまったのではちょっとわかりにくいかもしれませんが、何かの歌を聞いたり、美しい曲を耳にしたり、それからまたみなさんの小さかったころ、友だちといっしょにうたった歌のことを思い出したり、あるいは唱歌室のオルガンの音が頭に残っていたり——それから、もっとだれにでも経験のあることをいえば、小さいころ、おかあさんの背中や、夜の寢床の中で聞いた子守歌、みなさんを安らかに寝かせるために、おかあさんの歌ってくださいたあのやさしい子守歌のことを思い出したりする時に、何かしら、ちょっと口では言えない、不思議な氣持に包まれるようなことがさつとあると思います。その思い出の中には、必ずその歌をうたったり聞いたりしたころの自分の氣持や、境遇や、その当時の友だちのことなどが、必ずいっしょになって浮かびあがって來るのです。そしてそのころのうれしかったこと、楽しかったこと、あるいはまた悲しかったことなどが、夢のように自分の身のまわりを取りまいていような氣持になる。そういう歌の思い出や、美しい音

樂にまつわる記憶などというものは、年をとるに従ってだん／＼にふえて來るものなのです。

その晩の、雨あがりの、とまっている汽車の中で、私がうっとりとその音楽に聞き入っていたのも、実は心の奥にそういう氣持が流れ出していたからだったのです。そんな時間の、そんないなかの山の間の小さい停車場の建物の中で、だれが一体そんなレコードなどをかけていたのでしょうか。駅の名も今は覚えていません。汽車はまだしばらくとまっていた。向こうからはいつて來る汽車を待って、見知らぬどこかの駅でそういうように汽車がとまっていることなどはよくあることです。はじめのうちは乗客たちもいら／＼して、一体何をしているんだろう、早く発車すればいいのになどと、ぶつ／＼とを並べたりなどもしているのですが、そのうちにだん／＼時間のたつのがわからなくなり、自分が旅行をしていることなども忘れてしまつて、ぼんやり窓から外をながめている——みなさんも汽車に乗つて、きつとそんな氣持を経験したことがあるでしょう。

しかもそれが真夜中なのです。車中の人たちはたいいてい眠っています。その中で私だけが目を覚まして、その不思議な夜中の音楽を聞いている——その時、ふと私の頭の中に思い出されて來たことが一つありました。同じようなことを経験した中國旅行中の出來事なのです。その話を簡單にしてみましよう。

私が中國の古い都の北平ペイピン（もとの北京）に行ったのは、今からちょうど三年前の六月の末のことでした。北平の町に二、三泊したあとで、私は津浦線てんぽうせんで南京に向かいました。その時も小雨がしょぼしょぼ降っていたように覚えていますが、徐州じゅうという町の少し手前の兗州えんしゅうという駅に私の汽車が着いたのはやはり夜中に近い時刻で、その時も、私はう／＼と眠りながら窓ぎわの席にすわっていたのです。

私たちの汽車がどこかの駅にとまったことには、うす／＼気づいてはいましたが、いつまでもあたりが静かなので、そのまゝうっとり夢うつゝのさかいに自分を置いていました。

その時——その時は音楽ではなくて、雨のあとの夜中の澄みきった大氣をふるわせて、どこか遠くの方から、何か、細い金属と金属の尖端を触れ合わせるような、きん／＼した美しい音のようなものが聞えて来たのです。その美しい音はだん／＼私の方に近づいて来て、やがて私の窓の下を通って行くようでありました。その時、私ははじめて、その美しい金属性の音の交叉が、たゞの音でなくて、だれかが何かを話し合いながら、私の窓の下を通って行くのだということに気がつきました。若い女の人の声のようでもありました。また少年と少年の話し声のようでもありました。そして、その声は同じようにとりかわされながら、まただん／＼と私の窓の下から遠ざかって行くのです。そして「声」は次第に「音」になつて行き、またもとのように細い金属と金属の触れ合う時のような音になり、そして全く私の耳にはいらなくなつて行きました。

遠い異境の真夜中の見知らぬ小駅の列車の窓に頭をもたせかけたまゝ、夢うつゝの氣持の中で、私はいつまでもその美しい金属性の音のあとを追っていました。何やらさびしい、何やら心もとない氣持にひたりながら、それでも長い旅の疲れが出て、そのうちに私はまたこん／＼と寝入つてしまい、やがて汽車が徐州の長いプラットフォームにはいつて行ったのも知りませんでした。

その時間聞いたその声は、あとになつて考えると、どうやら中國の若い娘さんたちの声だったように思われます。私には中國語はわかりません。その美しい、きん／＼した金属性の声で、その若い中國の娘さんたちが何を話しながら夜中の兖州駅のプラットフォームを通り過ぎて行ったか——中國のこ

とばのわからない私には、その中國のことばの音の美しさだけがわかつて、即ちことばの音楽的な美しさだけがわかつて、それらのことばの持っている中み（意味）はまるでわからなかったのです。

ことばというものが音と意味とでできているということのみなさんは知っていますね。この二つの備わっているのがことばです。その一つが欠けていてもことばにはなりません。私がその夜中に聞いた美しい声は、ことばの音であつて意味ではありません。ことばの意味がわかると、私たちはその意味によつて、ことばのよしあしを感じる、ことが多いのです。いやな意味を持ったことばはだれもあまり好きになれません。その時私が、中國の若い娘さんのことばの音の美しさに夢うつゝの中で聞きほれていたのは、あるいはそれらのことばの意味が私にわからなかったからかもしれない。そのことばの一方の意味がわかつたら、その音の美しさの半分、あるいは三分の二以上も減つてしまつたかもしれない。

みなさん、私たちのふだん使っていることばにも、こういう純粹な音の美しい世界があるのです。音の美しさ、声の美しさだけではことばの役に立ちません。しかしことばの音の美しさというところに氣がつくだけでも、私たちがふだんに使っていることばというものがどんなに美しいものになるかということがわかつて思います。

音楽の世界、音の世界の美しさになれるようにしましょう。これは私たち人間にだけ許された高等な感覺の世界なのです。われ／＼人間だけが住むことを許された明かるい光の世界なのです。夜中に聞いた音楽、真夜中に耳にしたことばの音の美しさ——私はあのなつかしい中國でのいろ／＼の思い出にみたされながら、この文章を書きました。

〔兒童〕第一卷第四号 百田宗治の文による

六 地藏の話

なんでも、私が一番先に感覚し出したのは胸のあたりだと思ふ。首から乳へかけての辺が急にすうっと涼しくなったのをかすかに覚えてゐる。次には右の腕に感覚を生じた。ひいやりした外氣に触れて、私は思わずその腕をよるわせた。はじめには、その垂れている腕が少し重い気がしたが、やがてそんな氣もしなくなった。なんでも、その腕の形が少し変わったらしい。最初だらんと垂れさがっただけであつたのが、やゝ前の方に曲がつて、中指でひだのところをちよつとからげた形になつた。それからその腕が軽くなつた。

その次には左の腕に、それから手に感じを覚えた。前の方へ折れて、てのひらの上に何か珠を支えてゐるのだが、これははじめから重い氣はしなかつた。それから背中、両脚、腹部とだん／＼感覚を生じて来て、頭部に來た。頭部の中ではほゑが一番先に感覚を始め、その次に額が涼しくなつた。すると、にわかに私のすべての感覚がはつきり統一して来て、氣持が急に明かくなつた。私の目はまだあかなかつたが、私はもうあふるるばかりの光を内部に感じていた。そして私は涼しい、ほがらかな喜びを感じた。

次には耳ができた。そして私にはいろいろの世音が聞えるようになった。もし両方の耳が一時にあいたら私はとても堪えられなかつたらう。しかしその轟然たる雑音のひびきに私になれて來ると、あたりは不思議なほどの靜寂に移つて、たゞ私を作つてゐる者の小さなみの音だけが聞えた。

最後に私の両眼が開いた。私の目があいて一番最初に見たものは、私の目をじつと見つめてゐる二つの光つた目であつた。私はその目の力に驚いた。恐れをなした。

するとその恐ろしい目の持主は一步あとにすゞつて、大願成就した者のような押さえがたい興奮のいで、低く、重く、叫んだ。

「ありがたい。生きた。」

そしてかれは、小づちを持つた右手と、細いのみを持つた手とを固く合掌して、私の前に頭を垂れ、充実しきつた感謝の聲で、「なむあみだぶつ。」と唱えた。

私はすぐその男に愛を感じた。善いやつだわいと思つた。年ごろはもう四十近くみえたが、どこか子供らしい、單純な心を持つた男だということ、その目と額とを見ればわかつた。私はかれの全心を自分の心のようにびつたりと感じた時、胸が熱くなるのを覚えた。

かれが私のうしろにまわつた時、私は前方から私の上にもあたつて來る日光をはじめめてじかに感じた。その感じは恐ろしく白いものだった。私はそのまぶしさに、ちよつと目を苦しめられたが、しかし全身になんともいへぬ快さを感じ、からだと心が温まるのを感じた。私はまたその光の流れ來る窓のかなたに恐ろしく美しいものを見た。それは青空と、雲と、青い木の葉と、桃色の花とであつた。次にはまたいろ／＼の音声を耳にした。それもだいたい私にはいやなものではなかつた。ことに町に遊ぶ子供らの声などは、ちよつと極樂に住む鳥の声かと思われたほどきれいなものに聞えた。少しなれた心持であたりを見まわしてみると、私のいる室のほこりっぽくて、むさ苦しいさまがわかつた。しかも私の周囲にはずいぶんいろ／＼異様なものがある。腕の六本あるもの、首だけのもの、象とい

う獸の背上に座しているもの、恐ろしい怪物のような相好のもの、天人のように柔和な美しい様子のもの、それらはみな私より先にこの地上に生まれた私の同胞で、どれもこれも私の上に目を見すえているのだ。しかし私は、すぐかれらと自分の心があい通じていて、私たちが別々な心を持ってこの世に生まれたものでなく、私はかれらとらしくに話がでることを直覺したから、少しもそれに圧迫などは感じなかった。

で、私の周囲は清潔ではなかったが、それに少し寒くもあつたが、私は生まれて来たことを決していやには思わなかった。むしろ私は満足だった。私を作つた者も私が生まれたことをいやとは思っていない。どちらかといえば、少しのんきなくらいあきらめのいい男らし。

まもなくいろ／＼な人が私を見に来た。「拜ませてくださいませ。」と言つてはいつて来た。そしてかれらは私の前にすわり、香をたき、珠数をもんで何か口の中でむにやむにや言つてから私を見あげて、「はあ、結構なお佛様だ。」と言つたり、「聞くにもましたおみごとなお作でござる。」とか、「ありがたい。」とか言つた。ある者はまた白紙に金を包んで私の前にさげた。私はくすぐつたいようなおかしき氣がした。かれらの言ういろ／＼の賞賛のことばやすることは、いっこう私の心にとどまはしないけれども、かわいしい氣はした。こうしてその日も次の日も、多数の男女が入り代わり立ち代わり私を見物に来て、同じようなことを言つたりしたりした。

「良弁僧正や天竺の間答師のお作にも劣らぬ結構なお作じゃ。ほんに生きてござるようだで、あまり見ていると恐ろしゅうなる。」こんなことを言つた者もあつた。

「佛のおかげです。全く佛の法力によることです。」

私の作者は満足らしくこう言つて、にこ／＼していた。

ちよつとこゝで、私がうしろから自然と立ち聞かした人の語り草を総合して言つておきたい。私の作者は僧侶であつたか俗人であつたか、私はよく知らぬ。とにかく妻もあり、子もあつた。だから普通には出家とみなされていなかったことは確かだ、いわゆる佛師と呼ばれている者であつたらしい。出家でない者が神聖な佛体を刻むことはばちあたりだとやらで、かれはずいぶん迫害もされたものだ。一度は牢屋に投げこまれようとさえたが、かれを愛する一味の者に助けられた。しかし、かれの手からのみは奪い取られた。するとかれは土や乾漆で前のより一段とみごとな佛像を作つた。それがかの六本腕のある観音像であるとか。が、その仕事もとがめをうけたので、今度は筆で佛の絵をかいた。それでその筆もまた取りあげられたという。そんなことで生活は苦しくなつたので、かれの妻は、かれをそんなに苦しめるのはみな自分がいるためだと言つて、かれと別れて尼になる決心をしたが、「信心は心だ、形ではない。」かれはこう言つて、その必要を認めなかつた。かれは自分の仕事か正しく、佛の道になつてゐることをあつく信じていた。「彫刻の祕密は、万相のうち隠れている佛をおのが佛によつて呼び覚ますことだ。佛を呼び覚まされた者は生きてゐる。生きてゐる者はみな美しい、美は佛の相だ。一つでもほんとうに佛の相が刻まれたら、佛の下僕たる自分の使命は足る。」と、かれは言つていた。ともあれ、かくもあれ、かれはどんな運命の中でも、絶望したり身を持ちちくずしたりするにはあまりに帰依の心が純にして深かつた。かれのこの世に対する態度は、この世のかれに対する態度のいかんによつて動かされるようなものではなかつた。いかに暗い境遇の中にいる時も、かれは不幸な人間のようににはまるで見えなかつた。それほどかれはいつも和氣あい／＼たるおも

しろい明かるい心を持っていたので、かれと接することはだれにも氣持がよかったに違いない。結句、佛体を刻みさえしなければさしつかえないというので、かれに再びのみは與えられた。かれはそれで、いろ／＼のものを彫刻することを覚えた。しかしかれが何げなくたゞの人物を彫ると、たちまちかれがまた佛像を彫っているといううわさが立った。それも道理、実際それは期せずしてあらたかな佛像のごとく見えたから。普通の女人もかれの手にかゝれば吉祥天女のごとく輝いた。こればかりはいかんともしようがないので、とゞのつまり、東大寺のなんとかいう和尚の許可で、かれだけは特に在家の身で佛像を作ってもよいということになった。それ以來かれはかえって有名にもなり、生活もわりらしくになった。

かれの生活については、だいぶんいろ／＼の非難もあつたようだ。かれはごくむじやきな、むとんじやくな男だつた。人の所で酒を出されればそれをこぼまなかつた。本来、酒は好物だつたらしい。ある時、かれがちどり足で友だちの所からふら／＼帰つて來るところを運悪く人に見つかつて、それがまた一物議をかもしたことがある。その時はさすがにかれも少ししよげこんでいたとか。

が、それはとにかく、かれがその工室でのみを片手に持ち、右手につちをとつて、一心に合掌黙禱して後、じつと作に向かう時の様子は、まるでふだんとは別人の觀がある。全身靈魂の塊かと思われ、何か恐ろしいものにつかれた者のごとく見える。その全身全心にみなぎる熱と夢中さとは、雲をも呼び起す力があるかとみえる。しかし、かれは決して勢よく興奮したていでそれにかゝりはしない。人間にこれほどの莊重な靜寂が現われうるものかと思われるほどの、重い、端嚴な姿で、かれは限りなきていねいさと、細密さわまる丹念さをもつて、こつ／＼かすかなのみの音を立てている。どこをそ

んなにいつまでも執拗につつついているのか、ちよつと見たのではわからない。二日も三日も一つの小さい部分にかゝつていながら、その労力は、すべて作の内部に吸収されてしまつたように、表には変わりめがまるで目だたぬことがある。そんな隠然たる労力が、時にはずいぶん長い間続くので、日の暮れにのみを手放す時は、さすがの五体も綿のように疲れて見える。

「梵鐘には黄金をたくさんませないといひ音色は出ない。だがその黄金は銅の中に隠れているのだ。よき彫刻を作るにもその隠れた黄金が大事だ。」

かれはこう言つたことがある。

だが、私がかれのわきにいたのは長いことではなかつた。なんとかいう寺の住職が私を引き取るこゝとなつた。いよ／＼かれの家から私が運び出される時、かれは私にこう言つた。

「おまえは苦勞するだろう。わしも少しは苦勞した。わしにさびしい時があつたように、おまえにもさびしい時が多くあるだろう。だが、おまえを作つたことでわしはとこしえに生きるだろう。わしの名はわしからのだのようにじき消える。わしの名は決して後世に傳わりはしまい。だがそれでもよい。わしのうちに生きたもうた佛のうつし身であるおまえは死なない。おまえは木の破片だ。焼かれれば煙となつてしまふのだ。だがそれでも、おまえが作られ、そして生きたということは死なない。永遠に生きよ。人の心を打て。深く／＼打て。そしてそこに佛を呼び覺ませ。さらば、健在であれよ。しあわせであれよ。わが血と肉よ。」そしてかれはさびしそらに、つらそうに私をなでた。

かれの名まえは義道といつた。その名まえを知っている者は、今では私だけだ。

私の買われた寺は、小さな貧しい寺だつた。なんでもたいそう安い價だつたというが、大きな名あ

る寺では、かれの作物は買わないことになっていたとみえる。私かその寺のものになってからも、かれはしばしば私を見に来た。私の置かれた場所は、本尊の薬師三尊からずっとへだたった本堂のすみのうす暗い所で、参拜者は私に目もとめずに帰ることが多かった。

ところが、それから半月もたぬうちに、私はだれかしらの目にとまったのが縁で、他の寺に移されることになった。義道からまるでたゞのように私を買いつた、かの和尚はそのことではわかにかな身上になつたとか。

それは前のよりは数倍大きくもあり、美しくもある寺だつた。そして私は前よりもずっと大事にされた。毎朝私の前に新しい水がたむけられ、かちりよき伽羅がたかれ、左右には寺に咲く種々の花が生けられ、私の周囲は掃き清められた。

そこには、何よりもまず優美があり、しんめりとした物静けさがあり、かなりの真心と細心とがあり、自然な礼があつた。それらの華のうちに包まれて、私は安泰と愉樂とを感じた。前の寺は眞夏にも変に寒かつたが、この寺の中は嚴冬にも温かい。この温かみは私の何にもまして愛するものだ。それは尼寺であつた。私に仕える者はみなびくにてある。

私かその尼寺に移つて七日めには、私のために大きな法会が営まれ、数百の人がさんけいした。その頭主となつて来た人は、私かそれまで人間のうちに見た最もみめかたちのうるわしい人で、身にはあざやかな緋の衣をまとい、頭には輝く宝冠をいたゞいていた。で、私はそれが皇后というおかたであらせられることをさつた。

紫・もえぎ・とび色・襪紅色・黄などさま／＼の色の衣を着け、かわいい頭をば青くそりたてた品

よきびくにら、口々に念佛を唱えながら、堂の中を織るかごとくねりまわるさまは、いとも愛らしく美しいものだつた。私は極樂に住むごたちの遊戯を見るようなこゝちで、楽しくそれをながめた。

私は何にもまして人の真心を好むけれど、またかゝる形式のおもしろさをめざるものだ。それは心の美とあい伴なつて、淨土のうるわしさを人に示唆するものだ。

ところがある風の吹く春の深夜、くりから火を發して、びくにどもの黄色い声を立ててあわて惑う中に、見る／＼本堂は火焰に包まれ、しゆみだんは怒れる不動明王のごとく燃えた。華麗をさわめた堂のうち何一つ余すものはなく灰になつた。たゞ不思議にも、ひとり私だけはひだのすそを焦がし、全身の色を変えただけで取り出された。

私を取り出した者はひとりの尼であつたのだが、そんなことはかよわい女ひとりの腕ぐらいではとらうていかなわぬこととあるので、私自身の不思議な法力によるとされた。

それから長い／＼年月がたつた。所々方々の寺々を私は轉々してまわつた。しかしその後、尼寺には地藏尊は置かぬということにでもなつたものか、一度も行ったことがない。巻物を展ずるごとく移り変わる世相を次々とながめることは、興ないことでもなかつたが、おゝむね私は寒い思ひをした。なんでも都がよそに遷つたとか聞いた。寺は荒れに荒れ、雨は私の田舎の上に漏り、くもの巢は私のひじと胸との間に張つた。そうこうするうちにまた火災にも会つた。それは戦争のために寺を焼き打ちされたのであつた。しかしどういう運か、私はその時もやはり灰になることはまぬかれた。たゞし、ほうり出された時、下になつた私の左のひじは半ばもげてなくなつた。

なんのためにその時私か助け出されたのか、今なおがてんが行かぬ。なんとなれば、私はそれさ

しばらくの間は焼け跡の空地に投げ捨てられたまゝであつたからである。あるいは寺の僧が私を持つてのがれようとしてそのひまがなく、逃げうせたのであろうか。かくて青天井の私の周囲は、がらんとして明かるくはなつたが、私の上には風が吹きさらし、雨はほしいまゝに降りそゞぎ、雪は積もつた。煙にいぶされ、ぬれた上を日に照りつけられて、私の色はますます黒くしみだらけになつた。そして、湿地に触れている私の背中は腐朽し、虫が食つた。

ある目の悪いばあさんは、私を何か木の端とも思つたものか、しばらく私の腹の上に腰を掛けて一服しながら休んだが、「やれく、なまけない世の中になつたものだ。あみだ様はこの荒れかたをなんど見ていらつしやるだろう。なんだかまだありがたい灰のにおいがする。あゝ、なんという罰あたりめ。」と言つて去つた。が、その後またひとりの見知らぬ僧が私のかたわらを過ぎ、私に氣づき、「あゝ、もつたないない。」と言つて私を抱き起して立たせ、そして、「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。」と唱えながら去つた。

その後、幾度か春は來、秋は去つた。私は退屈で孤独だつた。そしてからだ次第に腐つて行くのを感じた。しかしどうせなるようにしかならない私のからだだ。私はのんきな心持をもつて、四季の移り変わるさまや、大空の月や星や雲をながめることにした。私の心は閑散で、わびしかつたが、依然としてどかで、晴朗であつた。人はたずねては來なかつたが、ひばりや、すゑめや、うぐいすは來た。小鳥は私の頭にとまり、肩やひざにふんをたれた。私はそのかわいい声を楽しく聞きながら、うつらうつらと眠つた。うとく／＼しているうちに、またがやく／＼とそう／＼しい音を幾度か耳にした。それは耳のわきで蚊の群れが騒いでいたのか、それともまた例の戦争を始めていたのか、どちらとも

知れぬ。どちらにしても私には用のないものだから、私は眠い目を開こうともしなかつた。

ふと目を覚ますと、私は小さな屋根の下にいた。それは百姓家だつた。坊さんではないが、いかにも人のよい、このごろの世には珍しい温かい心を持った感心なじいさんとばあさんだつた。なんでも、私が原の中で鳥のふんを浴びているのを見て、「とんでもないことだ。」と言つて、夫婦で車に載せて家へ持つて來たのだをうだ。

「あんまりひどくよごれてなざるからねえ。」ばあさんはこう言つて、どろだらけの私のからだに水でどうきんがけをし、顔をばたわしでこすつてくれた。そしてじいさんを振り返つて、「まあ見なせえ。こんなきれいな佛様におなりなすつた。」と言つた。

ところがある晩、ぬきみの刀をひつさげてほおかぶりをした大の男がはいつて來て、なんとか恐ろしい顔でこの老人夫婦をおどかしていたが、結局何も得るところがなかつたので、腹立ちまぎれに、私をこわきにかゝえて外へ出た。外へは出たが、何しろ重い私が荷やっかひになつたとみえて、「えゝ、重てえ野郎だ。めんどろくさい。このでくめ。」と言ひごま私をまた道ばたへほうり捨てて行つた。世はまた乱れた。だれも私などに目をとめる者もなかつた。その乱がしすまつてからしばらくたつて、私はまた拾われて他人の手にあつた。

私はある日その家にひよつこりとはいつて來た青年の顔を長く忘れないであらう。

「あれはなんですか。」とその青年はその貧しい家の主に聞いた。

「へ、あれですか。お地藏様ですよ。この間ある家の前を通つたらそこのおかみさんが、このお地藏さんをまさにするといつてぶち割ろうとしていらんですよ。もつたないことだ、まさにするくらい

なら私でもらって行くと行って、わらし五足と引き換えにもらって来たんですがね。」
青年は私の方に近よった。

「あや〜。」かれはなみ〜ならぬいぶかしげな調子でこう言い出した。「これはいい。」そしてちよつと黙った後で、「すてきだ。すばらしいものです。えらいものを手に入れましたね。」と更に驚嘆してつけ足した。

「へえ。一体いつごろのものでしょうな。」

主人は前と少し変わった調子で、乗り出しながらこう言った。

「確かに天平のもんです。まちがいはありません。そうでなければとてもこんな豊かさはありません。」青年は全く恍惚とした上氣したていで、顔を赤らめながら、なおもほとぼる語をついだ。

「なんというふつくらした柔らかさだ。この線、この肉づけ。この生きている不思議さ。このじんわりとした美しさ、温かさ。こんな美が、こんな傑作がわれ〜の先祖の手によって作られたかと思うと、ほんとうにありがたいほど氣じょうぶではありませんか。なんと肩身が廣いではありませんか。これが千年以上の昔に作られたとは、いやが上にも驚くべきではありませんか。あゝ、これは世界的なものです。日本以外に類のないりっぱさです。あゝ、ぼくらの先祖はえらかったのだ。」

私は満足した。よみがえったような氣がした。この青年の今のことばをあの義道が聞いたら、どんなにか満足したであろう。だが、こういう会心なことばを発する知己にめぐりあうまで、あゝ、私たちはいかに長い間さびしく待たなければならなかったであろう。

青年はどんなに私をほしかったことかしのれない。私もまたかれの所に行ってやりたい氣もした。し

かし青年はそれを言い出すことはできなかった。かれは貧しい一介の青年画工にすぎなかった。そしてもしかれがそれを言い出しえたとしても、かれのことばを聞いた私の主人は、もはや容易に私を手放しはしなかったであろう。

しかし青年は自分で私を買う必要はなかった。まもなく政府から遣わされた役人は、私を古物商の手から買いあげた。

そして今では、私はこの博物館の彫刻部の一室に、ガラス張りの大きなわくの中に、他の美しい佛像の傑作とともに莊重に並べられて、靜かに公衆の面前に立っている。

私の前には白い紙の札が鄭重に立てられ、それにこう書いてある。

「地藏菩薩像。木彫。天平時代。作者不詳——國宝。」

(長興善郎著「茶種園」による)

七 ひさかたの

古今和歌集

本課は古今和歌集から選びとったものである。古今和歌集は、また略して古今集とも呼ばれている。醍醐天皇の勅によって撰集されたもので、有名な「やまとうたは」の序に始まり、四季・賀・離別・禊旅・雑歌などの部に分かれ、二十卷より成っている。

すでに学んだ万葉集は、歌風が五七調で質実なすなおな直接的な表現であったが、古今集は七五調となり、表現も主観的な抒情のものや、技巧本位のものが多くなっているなど、比較してみるといろいろな時代的な特徴を探し出すことができよう。

この集の人々によってうたわれている四季おり／＼の趣を味わってみよう。そして次の新古今集の歌風とどのような違いがあるか調べてみよう。

題知らず

よみ人知らず

春日野のとぶ火の野守いでて見よ今いくかありて若菜摘みてむ

初瀬にまうづることに宿りける人の家に、久

しく宿らでほどへてのちにいたれりければ、

かの家のあるじ、かくさだかになむ宿りはあ

るといひ出たしてはべりければ、そこに立て

りけるうめの花を折りて詠める

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞむかしの香ににほひける

紀貫之

紀友則

ひさかたの光のとけき春の日に静心なく花の散るらむ

さくらの花の散るを詠める

よみ人知らず

わが宿の池のふちなみ咲さにけり山ほととぎすいつか來鳴かむ

はちすの露を見て詠める

僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあぢむく

池のほとりにもみぢの散るを詠める

凡河内躬恆

風吹けば落つるもみぢ葉水清み散らぬ影さへ底に見えつゝ

冬の歌として詠める

源宗于

山里は冬をさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

壬生忠岑

みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人の音づれもせぬ

惟喬親王のもとにまかりかよひけるを、かし

らおろして小野といふ所にはべりけるに、正

月にとぶらはむとてまかりたりけるに、比叡

の山のふもととなりければ、雪いと深かりけり。

しひてかのむろにまかりいたりてをがみける

に、つれづれとしていとも悲しくて、帰り

まうできて詠みておくりける

在原業平

忘れては夢かとぞおもふ思ひさや雪ふみわけてきみを見むとは

八 木の根

一

まつの木に囲まれた家の中に住んでいても、まつの木の根が地中でどうなっているかはあまり考え

てみたことがなかった。美しい赤かつ色の幹や、わりに色の浅い清らかな緑の葉が、長いなじみであるまつの木全体であるような氣持がしていた。雨が降ると幹の色はしっとりとし落ち着いた、うるおいのあるあざやかさを見せる。緑の葉は涙にぬれたようななしおらしい色つやを増して来る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のようなさわやかな氣分が、木の色や光の内に漂うて、いかにもほがらかな生の喜びがそこにおどっているように感ぜられる。おりふしかわいい小鳥の群れが生き／＼した声でさえずりかわして、緑の葉の間を樂しそうに行き來する。——それが私の親しいまつの木であった。

しかるにある時、私はまつの木の子育こぶくた小高い砂山をくずしている所にたゞずんで、砂の中に食いこんだ複雑な根を見まもることができた。地上と地下の姿がなんとひどく相違していることだろう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しそうに葉先をそろえた針葉と、——それに比べて、地下の根は、戦い、もがき、苦しみ、精いっぱいせいの努力を盡くしたように、枝から枝と分かれて、乱れた女の髪のごとく、地上の枝幹の總量よりも多いと思われる太い根、細い根の無数をもって、いっせいに大地に抱きついている。私はこのような根が地下にあることを知ってはいた。しかしそれを目の前にまざまざと見た時には、思わず驚異の情に打たれぬわけには行かなかった。私は長いなじみの間に、このような地下の苦しみが不断にこれらにあることを、一度も自分の心臓で感じたことがなかったのである。かれの苦しみの声を聞いたのは、時おりに吹く烈風の際であった。かれの苦しそうな顔を見たのは、湿りのない炎熱の目が一月以上も続いた後であった。しかしその叫び声やしおれた顔も、その機会さえ過ぎれば、すぐにもとの快活に歸って、苦しみのあとをめたにあとへ残さない。しかもかれらは、われ／＼の目に秘められた地下の営みを、一日も怠ったことがないのであった。あの美しい幹も葉も、

五月の風に吹かれて飛ぶ緑の花粉も、実はこのような苦勞の上にも可能なのであった。

この時以來、私はまつの木のみならず、あらゆる植物に心から親しみを感ずるようになった。かれらはわれ／＼とともに生きてるのである。それはだれでも知っていることだが、私には新しい事実としか思えなかった。

二

私は高野山へ登った。そうして不動坂にさしかゝった時に、数知れず立ち並んでいるあの太いひのきの木から、なんともいえない莊嚴な心持を押しつけられた。なるほどこれは靈山だと思わずにはいられなかった。

それは外郭につらなる山々によって平野から切り離された、急峻しゆんな山の斜面である。幾世紀を経て來たかわからない老樹たちは、金剛不壞こんごうぶげということばに似つかわしいほどのどっしりとした、迷いのない、壯大な力強さをもって、天を目ざして直立している。そうして木々の間に漂うている生々の氣は、ひた／＼と人間のはだにも迫って來る。私は底力のある興奮を心の奥底に感じはじめた。

私の目はすぐに老樹の根に向かった。地下のはげしい営みはすでに地上一尺の所に明らかに現われている。土の層の深くないらしいこの山に育って、あの亭々たる巨幹を支えるために、太い強靱な根は力限り四方へ廣がって、地下の岩にしっかりと抱きついているらしい。あの巨大な樹身にふさわしい根は、一体どんなであろう。ことにあい隣った木の根と入りまじって薄い地の層の間に複雑にからみあっているありさまは、想像するだけでわれ／＼に驚異の情を起させる。

確かに山ははげしい生の力の営みによって、残る所なく包まれているのである。われ／＼はそれを

肉眼によつて見ることはできなかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることはできた。隠れたる努力の威圧が、神祕の影をさえ帯びて、われ／＼に敬虔の情を起させずにはいなかつたのである。

私は老樹の前に根の浅い自分を恥じた。そうして地下の営みに没頭することを自分に誓つた。今氣づいてもまだ遅くない。

三

成長を欲するものはまず根を確かにあろさなくてはならぬ。

上に伸びることをのみ欲するな。まず下に食い入ることを努めよ。

四

早年にして成長のとまる人がある。根をあろそかにしたからである。

四十に近づいて急に美しい花を開き、豊かな果実を結ぶ人がある。下に食い入ることに没頭していつたからである。

私の知人にも理解のいい頭と、感激の強い心臓と、よく立つ筆とを持ちながら、まるで労作を發表しようとする人がある。かれは今生きることの苦しさは正倒せられて、自分のようなものは生きるねうちもないとさへ思っている。しかし、それはかれの根が一つの地殻に突き当たつて、それを突破する努力に悩んでいるからである。やがてその突破が実現せられた時に、どのような飛躍がかれの上に起るか。——私はかれの前途を信じている。根の確かな人から貧弱な果実が生まれるはずはない。

五

古來の偉人には雄大な根の営みがあつた。その故にかれらの仕事は、味わえば味わうほど深い味を

示して來る。

現代には、たとい根に対する注意が欠けていないにしても、ともすればそれが小さい植木ばちの中の仕事に墮してはいはしないか。いかにすれば珍しい変種ができるだろうかとか、いかにすれば予定の時日の間に注文通りの果実を結ぶだろうかとか、すべてがあまりに人工的である。

天を突こうとするような大きな願望は、いじけた根からは生まれるはずがない。

偉大なものに対する崇敬は、また偉大なる根に対する崇敬であることを考えてみなければならぬ。

六

根のためには、できるならば、地の質を選ばなくてはならぬ。

果実のためには、できるならば、根をつちがう肥料を選ばなくてはならぬ。

根に対する情熱を鼓吹し、その根の本能的に好むところの土壤のありかを教え、そうして、幾千年來堆積している滋養分をその根に供給してやるのが教育の任務である。

七

教養は培養である。それが有効であるためには、まず生活の大地に食い入ろうとする根がなくてはならぬ。

人々はあまりに根の本能を忘れてはいはしないか。いかに貴い肥料が加えられても、それを吸収する力のない所ではなんの役にも立たない。私は教養の機会と材料とがわれ／＼の前に乏しいとは思わない。たゞそれに相当する根が小さいのを忘れる。

なんじの根に注意を集めよ。

(和辻哲郎著「偶像再興」による)

九ひとりの力

エドワード・ボックはアメリカの事業家で、科学的な経営によって、世界で最もすぐれているといわれる婦人家庭雑誌を発行した出版界の成功者である。かれの偉大さはどんな貧苦や困難にもうち負かされないで、常に自分の力を最大に、しかも有効に發揮して人々のためにはかったことである。

(一)は、ひとりの力を最も美しく強く現わしえたボックの祖先の傳記であり、(二)は、ボックが婦人に向かつて呼びかけたことばを集めたパンフレット *Yon* を訳したものである。これらによって、ボックの精神がいかなるところから生じて来たか、また、人々にいかに働きかけたかを知ることができよう。本課を読んで、何を考え、何を感じたか、まとめて発表し合ってみよう。

(一) めい／＼の住む世界をよりよく、より美しくせよ。

一

オランダの海岸から五マイルばかりの沖合、北海の荒海の中に、緑したゝる樹木におゝわれた美しい島がある。

その島の周囲は、無氣味な無数の暗礁がとりまいていて、附近を航海する船は、一再ならず、その暗礁に乗りあげた。

その上、この島に海賊が集くつていて、船が難破すると、のがさず、近づいて、掠奪と虐殺の限りを盡くした。

「魔の島」としてだれひとり寄りつく者がなかった。

オランダの政府は、この残忍な海賊の禍を除いて、島の整理をしようと思ひ立った。

そして、時の國王ウィリアムは、特に、ヘーグの若い弁護士を選抜して、その任に当たらしめた。

「余はなんじの力で、あの島を整理したいのだ……。」という、國王の命令であった。

それは二十歳そこ／＼の若者にとっては、容易ならぬ仕事であった。國王の命令でかれは、その島司となり、その後裁判所が設けられた時、判事に任命された。

かれは、その二つの地位職権をもつて、島の整理に当たつたのである。

二

若者はその島に引き移ることにした。そして住むべき場所を捜し求めた。しかも荒れるがまゝに任せたこの島には、たゞ一本の樹木さえなく、見渡す限り、荒れに荒れたもの恐ろしい土地であった。それでも、かれはこう言うのであった。

「いかにもみにくい島だが、美しくしようと思えば、いかようにも美しくなるのだ。」と。

ある日、かれは島の評議会の席上で、

「われ／＼はさしあたり、この島に樹木を移植しよう。ぶざまなこの島も、われ／＼の心がけ一つで、どんなにも美しくすることができ……。」と提案した。

しかしかれのこの提案は、猛然たる反対に会つた。つまり、いくらかある金は、樹木より、もっと

必要な方面に振り向けねばならぬというのが、反対の理由であった。

「それでは自分の力でやりましょう……。」かれの決断であった。居合わせた人々の中で、かれのこの一言が、將來どういふ結果をもたらすか、もとよりそれを予知する者さえなかった。

その年、まず、かれは百本の木を植えた。この島に青い樹木の姿を見たのは、これが最初であった。「とても寒さが強うございます。北海の恐ろしい風やあらしに会っては、ひとたまりもなく枯れてしまひましょう。」と、島の人たちは心配した。

「それじゃ、わたしはもつと植えよう。」その後、五十年の間、かれは毎年それを繼續実行した。

島の官有地を公開して、大小幾つもの公園を作り、毎年春になると、いろんな草や木を植えた。

三

はげしい海のしぶきにぬれても、木はすく／＼と伸びて行った。

あらしに狂う北海のものすごさは想像のほかだが、陸から荒れ狂う海原へ吹きやられた小鳥が、疲れた翼を休める方寸の土地さえなかった。

何百、何千羽と、数知れぬ鳥の死体が、広い海原をおくこともしば／＼であった。

ところが、いつか、樹木が健やかに伸びて、はるかかなたの陸から見えるようになると、ある日、風に吹きつけられた一羽の鳥が飛んで来た。そして、青々と繁った葉影に疲れた翼を休めた。

まもなく、また一羽の鳥が飛んで来た。こゝちのよい憩いの場所に恵まれた鳥は、ひとさわ声を張りあげて歌うのであった。

それから数年の間に、無数の鳥が、この新しい島の木を目がけて集まって来た。島の人たちはこの

ありさまに、驚きの目をみはった。

そうなると、五マイル離れた本國でも、あの島は珍しい小鳥の樂園だという評判が高くなった。

安住の地を得た小鳥の喜びはさこそ。かれらは鳥の一隅を選んで、卵を産み、ひなを育てる場所とした。

するとその場所は、たちまち、何万とも数知れぬ鳥の卵でうずまるといふ始末であった。

まもなく、世界各地の動物学者は、世にも奇跡的なこの情景を見るべく「卵の島」へとつえをひくようになった。

四

ある日、あらしで海原へ追いやられたひとつがいのカナリヤが、この島に飛んで来た。そして、こちのよいこずえに巢をこしらえた。カナリヤの歌う不思議な調べは、島人の胸を躍らせた。

夢のようなたそがれが島に迫ると、女や子供は、うち連れて公園にやって来る。そしてカナリヤの歌に耳を傾けた。

最初二羽にすぎなかったカナリヤは、やがて無数にふえて、この島は、ついには「カナリヤの島」という名で、多くの人々に知られるようになった。

青年弁護士は、今や壯年の域に入ったが、あい変わらず、木を植えることをやめない。ついに島一面は美しい緑衣を着飾り、日に焼けて荒れ果てた路は、涼しい木陰でおゝわれるようになった。

この島の話を聞いた美術家は、カンバスを携えてやって来た。かつては住む人さえなかったこの島も、青年の丹誠によって、美術家の絵の対象になるほどの美しい島となったのである。

ヘーグの若い弁護士がこの島に来て、最初の木を植えてから、かれこれ百年の星霜は経ている今、その樹木は、亭々として天を摩している。
かれが眠れる墓地は、かれが植えた緑の木々におゝわれて、その葉末よりしたゝり落ちる露は墓石のこけをぬらししている。

五

これだけの大仕事は、まさしく、かれひとりのなしとげえたところであるが、こればかりではなかつた。かれがこのすさみきつた島に引き移ってから二年後のある日、かれは本國へ帰り、そして今度は、花嫁を連れてもどつて来た。それは、樂しがるべき新夫婦にはふさわしからぬ凄愴な地であったが、若い夫人はよく夫の意を体し、ものやさしく言うのであった。

「あなたは、木をお育てなさいまし。私は子供を育てましようから……。」と。そして、二十年の間に十三人をあげた。

子供がみな一人まえになつたある日のこと、母は子供たちを集めてこう言つた。

「わたしはおまえたちのおとうさんのことと、この島の由來についてお話しします。」と言つて、大略上に述べたような話をして、更に語をついだ。

「さて、おまえたちは、いづれ、これから世の中に立つて行かねばならないのですが、その時は、みな、おとうさんの事業の精神を受け継いでもらいたい。進むべき道と所は異なつても、おとうさんがなさつたように、めい／＼に住むこの世の中を、少しでもより美しく、よりよいものにしてほしい。これがおかあさんから、おまえたちへのメッセージです。」と。

六

長男は、身体の健康な人たちを引き連れ、住みなれた母のひざもとを去つて、南アフリカへ移住した。まもなく、ブーア族として知られるようになった。かれが不断の努力は、南アフリカの原野に幾多の都市を建設し、ついに新興國が生まれるにいたつた。即ちトランスヴァール共和國である。かれは衆望によつて國務卿の任についた。

今日の南アフリカ連邦は、この賢明なる母のメッセージ——この世の中を少しでもより美しく、よりよくせよ——に負うところが少なくない。

次男はオランダの本土に渡つた。そこに小さな教区を持つて、神に仕える身となつた。崇高なかれの行いはたちまち全國の津々浦々までひびき渡つて、その死を報ぜられた時には、國王をはじめとして、國民のすべてが、悲しみ、嘆いたということである。

ある夜、恐ろしいあらしがこの島を襲つた。その夜、わが身の危険をものともせず、山なす激浪のまつたど中に飛びこんで、尊き人命を救つた勇敢なる少年があつた。それは三男であつた。かれはさつそく家にかつぎこんで一心に介抱した。そのかいあつて、まもなく蘇生したが、その救われた人はかのトローイの死都の有名なる探検家ハインリッヒ・シュリーマンであつた。

七

次に、縁におゝわれた、やさしい小鳥の島を巢立つた長女は、夫の感化を受けて、哲学の研究に専念し、夫の死後はその事業を引き継いで、ついに大部な哲学書を大成した。

二女は夫を助けて、偉大な説教家たらしめた。そしてよく神の道を説いて、四十年の長き年月、人

人の善導に盡くした、そのほか、男子は、あるいは本土に行つて官吏となり、あるいは島にとどまつて父の業を継承したが、志すところは、世のため人のためであつた。また三女は、一生独身で、盲人のために家を建て、不遇なかれらに温かい平和な生活を興えた。

かようにして、偉大な両親のもとにはぐくまれた子供たちは、父の美しい物語を胸にひめ、母の偉大なメッセージをしっかりと抱いて、めい／＼の道に精進した。そして、うづばにその目的を果たして、永遠にその足跡を残している。

およそ善行は永遠に残る。その昔、荒れに荒れた北海の一孤島に木を植え、草を移して、緑のしたたる樂土と化し、小鳥の樂園と化した、一男一女の尊い行い、それは、今もなお大きな波紋を描いて、世界のすみ／＼まで波及している。

今やその子孫は世界に散じている。ある者は東インドに、ある者はアフリカに、またある者はアメリカに……。めい／＼の天分は異なり、たどる道には別あれど、その使命を果たすべく、祖先の精神を発揮することに努めている。

エドワード・ポックもまさしくそのひとりで、かれは機会あるごとに祖母のメッセージ——めいめいの住むこの世界を少しでもより美しく、よりよくせよ——を果たすことに努めた偉人である。

(二) なぜば成る自己の力を認識せよ

一

余は、なんじ自身が偉大なる力の持主であることを力説する者である。われ／＼のひとりひとりに深く植えつけられている隠れた力を自覚すること——それはひっこみ思案の人間の心に、一脈の光明を興えることと信ずる。

ひっこみ思案の人間は世の中に非常に多い。かれらも向上心は持っている。しかし実行する段になると、いつも自己を分析する。

「自分は一体なんだろう。」または「自分はわずかひとりの人間にすぎない、ひとりで何ができよう。」と。

これがために、いつも積極的の活動ができなくなる。更に自分で自分をけなし、自分で自分をいやしめ、自分で自分の力を低く見積もって、毎度足りないという断案をくだす。

かれらは、われ／＼のひとりとひとりに、偉大なる力の種子が植えつけられているばかりでなく、その種子を十分に発育させる能力もともに興えられていることについては、まるで意識していない。

二

一例をあげてみる。

「私は一婦人にすぎない。」という嘆声をよく聞く。しからばどれだけの人数があつたらよいのだ。昔から大事を遂行した人は、自己のほかに、どれだけ多くの人を要求したか。一婦人ではなかつたか。フローレンス・ナイチンゲールは一婦人ではないか。しかも彼女がクリミア戦争中における一婦人としての働きは、そのまま、赤十字となつた。もしこのイギリスの看護婦が、あの惨たる場面に直面して、私は一婦人にすぎないのだと言つて、自分で自分を卑下し、手をつかねてむなしく座していたな

らば、今日全世界を通じて、傷病者を看護するという事業が、どれほど進んでいたかは疑問であろう。戦場の夜はふけて行く、軍医はひとり残らず寝につく、幾マイルとなく続く傷病者のベッドはたゞ暗黒と静寂に包まれているだけだ。この気味の悪いほど静まり返った暗黒の中に、たゞ一つのランプの光が、病床から病床へと動くのが見受けられた。それはフロレンス・ナイチンゲールの、大いなる人類愛の情に動くランプであったのである。

また、一婦人として偉大な働きをした人に、ラジウムを発見したキューリー夫人がある。彼女は夫がこの世を去った時、「私は一婦人にすぎぬ。」と言って、なすところがなかったならば、その研究をだれが完成したことであろう。

「私は信念を持っていました。それがすべてです。」とナイチンゲールは言っている。「私には自信がありません。ほかに何物もありません。」キューリー夫人のことばである。

自己の内にある種子を認め、それを発育させて、その力によって、世にも偉大な果実を結ばしめたのである。

ふたりとも大なる信念と、隠れた力の持主であった。この事実を知った者は、それは例外だと言うであろう。果たしてそれは例外と見るべきであろうか。

三

それではこの婦人もまた例外か。

ある日六歳になる少年が、先生の手紙を持って学校から帰って来た。その手紙には、「この子供は、あまり低能で勉強する資格がないから、退学させたらいいだろう。」という意味のことが書いてあった。

「私の子供に限って低能ではありません。私自身で教えましょう。」手紙を見た母親はこう叫んだ。彼女は実行した。その結果トーマス・エジソンができたのである。

例外か、あらず、彼女のないうるという信念である。

四

もっと実例をあげてみよう。

「私は夫と子供をかゝえて、毎日の仕事に追われている一主婦にすぎない。」と、だれか、こう言うであろう。

アブラハム・リンカーンの継母は、一主婦にすぎなかった。しかし彼女は始終炬火を掲げて、かれを教育し、かれを激励した。それはやがて人間解放に導いたのである。

「私が読んだ最大の本は何かというさみの質問に対して、私の母だと答えます。」と、リンカーンはある手紙の中でいっている。

五

われ／＼は、まだ世界の大事業が常にひとりの人間によって始められたものであるという事実がはつきりのみこめていないように思われる。

この事実をエマソンはよく了解している。かれはこういっている。「すべて偉大な制度は、ひとりの影を引き伸ばしたものにすぎない。」と。またルーズヴェルトは、「アメリカの発展に貢献したすべての制度は、一個人の創意と熱誠との上に建てられたものだ。」といっている。

とかくわれ／＼は、他人は自分より偉大だと考える。他の人々にのみ天與の才能があるので、自分

にはないのだと考える。

われ／＼は自分で自分の力量を最低に見積もる。それだから成功がない。まづ自分に力のあることを自覚せねばならない。

六

「私は一教師の身分にすぎぬ。」という嘆声を聞く。「一教師……」。いかにも自分をけなした調子であるが、教師は生きた感化を與えるのに、母に次ぐよい地位にあるのだ。

これは余の知っている一女教師の実話である。ある夜、静かに自分のことを瞑想していると、彼女は突如、「私はなんの価値もないものだ。」と叫んだ。するとその次の瞬間、彼女の魂は、「私はすべてである。」と叫んだ。

彼女はこの魂の叫びを聞いて、あたかもライオンがたてがみの朝露を振り落すがごとく、過去いっさいの捕らわれた考えを振り捨てた。

彼女の頭はおのずから高くあがった。彼女の目はまっすくに、めいりょうに見ることができた。彼女の心は今まで見失っていた不思議な機会をつかんで躍りあがった。

その日から、教場における彼女の態度は一変した。彼女の児童を見る目は、新しき輝きに満ちあふれ、天與の力に目覚めた彼女の声は、一語一語児童の心深く食いこんだ。それから一年にして、彼女は女教師の首席に進み、更に一箇年後には、全校の主と仰がれるようになった。

「私はなんの価値もないものだ。」というのは信念のない人、「私はすべてだ。」と叫ぶ人は自己の力を認めた者で、その人は熱烈に、鋭く、その力の実現に突進する。

余はドッドリッジのことを忘れることができない。

眠れる魂を呼び覚まし、

全筋肉を張りつめて、

勇敢に突進しよう。

七

ナポレオンが、「境遇とな。余は境遇をつくるのだ。」と言ったのは有名なことばである。それは自我の強い個人主義のことばではない。

それは事実である。われ／＼はすべて境遇をつくりうるのだ。われ／＼のだけれが……。もっと具體的な例をとって、近代の最大問題であり、人類の破壊者である戦争について考えてみよう。われ／＼のひとりひとりの中から戦争という事実をきれいに洗い去って、平和の理想をもって代わらしめたならばどうなるか。戦争は起りようがないことになる。こうなると、戦争という、さしも重大なる問題も、結局は一個人の問題に短縮されるのである。

われ／＼のひとりひとりが戦争などいやだと決心したならば、どうすることもできない。いかなる団体、いかなる政府も、ある確乎たる結論に向かって決心した者に対しては、どうすることもできない。この偉大な、しかもこの單純な眞理を、自分の心の中へまっすくに受け入れよう。

(京谷大助著「アメリカに学ぶ」による)

●
●
國語學習の手引

中等國語二(3)に載せてある教材は、次に掲げた作者の作品によつたものである。こゝにしるさない教材は、古典ならびに文部省作である。

課名	題目	原作者訳者	原典
一	自分は太陽の子である	福士幸次郎	太陽の子
二	音と文字		
	(一)	宮城道雄	雨の念佛
	(二)	内田百閒	凸凹道
五	夜中の音楽	百田宗治	「兒童」第一卷第四号
六	地蔵の話	長興善郎	榮種圃
八	木の根	和辻哲郎	偶像再興
九	ひとりの力	京谷大助	アメリカに学ぶ

國語學習の手引

次に掲げたものは、各課の教材を學習するに当たり、どんなことをしたらいいかを、幾つか拾いあげて書き示したものである。

各課の文章を読むための準備もあり、その心構えもある。またその方法となるようなもの、理解を助ける問題、理解をためす質問、更に理解を發表する話し合いもある。

なお、表現力を伸ばすための仕事も織りこまれており、研究調査のしかたを示してもある。

しかしこれらは、みな必ず完成しなければならないものではなく、適当に取捨選択をしたり、あるいは補充したりして、興味のある正しい學習を進展させて行ってほしい。

一 自分は太陽の子である

(1) この詩を味わうに手がかりとなるような次のことばをよく読む。

まっぴるまの明かるい幻想

今くすぶりつゝある

あゝひかりある世界よ(……空中よ、……人間よ、……人よ)

(2) 「太陽の子」とは何を意味するかを考えよ。

(3) 感動の高まっている部分をよく味わう。

(4) この詩を味わつたあとの感想を文に書いたり、話し合ったりする。

二 音と文字

- (1) 「雨の念佛」の文について、作者独自の感覚を示す文をあげる。
- (2) 季節に対する敏感な感覚が、どんなことばで表わされているかを注意して読む。
- (3) 私どもの氣づかない「音の世界」について話し合う。
- (4) 「一」と「二」との関係を考えてみる。
- (5) 文字の種類や本質について、小学校の「國語」の文を読み返して研究してみる。
- (6) この二つの随筆文の特徴やうまみについて調べる。

三 希望

- (1) 次の問に答える。
 - イ、一・二・三の各節には、それ／＼どんな題をつけたらよいか。
 - ロ、日本の観光事業の將來について、この少年はどんな希望と抱負を持っているか。
 - ハ、郷土の織物の美しさについて、この少女はどんなことばで表わしているか。
 - ニ、瀬戸陶器に対する誇りを、この作者はどんなことばで表わしているか。
- (2) 自分の郷土の特産物や特殊の産業を主題として文や詩を作る。
- (3) 「觀光日本」という作文を書いて批評し合う。
- (4) 思い／＼の「希望」を文にして、知人や遠くの友人に送る。

四 鬼ごっこ取りとわらわし

- (1) 自分たちの聞いた「こぶ取り」の話と比べながら読んで行く。
- (2) 会話の部分が生き／＼したことばづかいとして理解されるまで何べんも読む。
- (3) ふたりの翁の様子、鬼の様子が、どういうことばで表わされているかを注意して読む。
- (4) この文を見ながら、弟妹たちはこの話をして聞かせるのもよい。
- (5) 宇治拾遺物語などの、古い説話文学について調べる。これらの中にある有名な話について話し合う。

五 夜中の音楽

- (1) この文を通して、作者は何を言おうとしているのかを考える。
- (2) めい／＼の心に食い入っている音楽の思い出や体験について話し合う。
- (3) ことばの音の美しさとは何か、具体的に答える。
- (4) 今まで学習した國語教科書の文章で、音に関するものを読み返して、比べてみる。
- (5) この文を読んだあとの感想を書く。

六 地蔵の話

- (1) 地蔵のたどつて来た運命を、順々に簡単なことばで書いてみる。
- (2) この話の中に出て来る、おもな場所、おもな人物を抜き出す。
- (3) 一つ／＼の遠くた境遇を、地蔵はどうながめて来たかについて調べる。
- (4) 以上をもとにして、この作品が何を物語っているかを話し合う。

- (5) 表現については、次のようなことを注意する。
- イ、義道という男の人物を書いているところ。
 - ロ、世相の移り変わりに対する地蔵の心持を描いたことは。
 - ハ、青年が地蔵を見つけた時の驚きと感激。
 - (6) できたら、シナリオ風に表現してみる。

七 ひさかたの

- (1) 一首一首の歌の心を、わかりやすく説明できるようにする。なお、万葉秀歌の例にならって、どれか一、二首を評釈してみる。
- (2) 万葉集と比べながら、次の学習をする。
- イ、七五調につき例をあげてみる。
 - ロ、技巧本位というのは、どういうことか。
 - ハ、声を出して読み、万葉集の歌の調子との違いを調べる。
 - (3) 古今和歌集の歌風の特徴を、箇条書きにする。
 - (4) 古今和歌集のおもな歌人とその作品について研究する。
 - (5) 「ことばがき」のついた和歌を作ってみる。

八 木の根

- (1) この文を読んで、何を教えられたか、考えたことをまとめて話し合う。たとえば、「雄大な根の営みはなぜ必要か。」「根の本能を忘れるな。」などを話題にする。
- (2) 次の問に答える。
- イ、松の木の根が地下に食いこんでいる様子を、どう表わしているか。
 - ロ、それを見て、作者は、何を感じたか。
 - ハ、深山の老樹の持つ底力は、どこから来るのか。
 - ニ、「地下の営みに没頭する。」「根をおろそかにする。」「根の確かな人」とはどういうことか。
 - (3) この課の中で、深く心にとま。たところを幾つかきれいに書きとめて、反省資料とする。
 - (4) 自然物を見つめていると人生について教えられることが多い。それを、短いことばにつまみ。てみる。

九 ひとりの力

- (1) 鳥がだん／＼よくなって行く経過を読みとる。その中に貫ぬいている「ひとりの力」について考える。
- (2) 母のメッセージの意味と、そのことばの力を考える。
- (3) 「信念」がいかにたいせつであるかを教える例を幾つかあげる。
- (4) こゝに引用されている幾つかの偉人のごとばの意味をよく味わう。
- (5) 「七 木の根」とどんな連絡があるかを考えてみる。
- (6) 現在の日本をよりよくするためには、どんなことを考えたり、したりしたらよいか、作文に書いてみる。

中等國語

二
(3)

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE June 23, 1949)

昭和二十二年十二月二十三日印
昭和二十二年十二月二十七日發
昭和二十三年七月十三日修正印刷
昭和二十三年七月十七日修正發行
昭和二十三年七月十七日修正翻刻發行
〔昭和二十四年六月二十三日 文部省檢査済〕

著作權所有
著作兼發行者

文 部 省

翻 行 者 刻

東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
代表者 阿部眞之助

印 刷 者

東京都北区稻付町一丁目二〇八番地
二葉印刷株式會社
代表者 大野治輔

東京都千代田区神田岩本町三番地

發 行 所

中等學校教科書株式會社

昭和24年版・定價 12 円 20 錢



広島大学図書

01 0130449676

